

岩手県野田村の支援・交流活動報告（2013年 8月 11—12日）

今回は、弘前大学ボランティアセンター初の試みとして、野田村の子どもたちと一緒に泊りがけで災害ボランティア活動や「みらいしんぶん」作りなどを行う、宿泊学習を実施しました。きっかけは、野田村の教育関係者や小学校の子どもたちから「より長い時間を大学生と過ごし、多くの思い出を作りたい」という声が寄せられたことにあります。ボランティア活動やワークショップを通じて、野田村の子どもに住民慣れた地域の良さを再認識してもらい、大学生に被災地の実情を実感してもらうことを目的に掲げ、学生の宿泊費等は公益財団法人さんりく基金の大学連携地域支援事業の助成を受けることができました。

参加者は、弘前大学から学生12名と教員2名、一般9名（弘前大学卒業生、元教員、コーディネータ役を含む）の計23名でした。現地では、岩手県の不来方高校8名、京都大学2名、八戸高専4名の学生、教員と合流しました。また、野田村の子どもたちは、8名が泊まりがけで、加えて数名が2日目の「みらいしんぶん」作成から参加してくれました。



スポネット弘前の鹿内さんによる活動説明

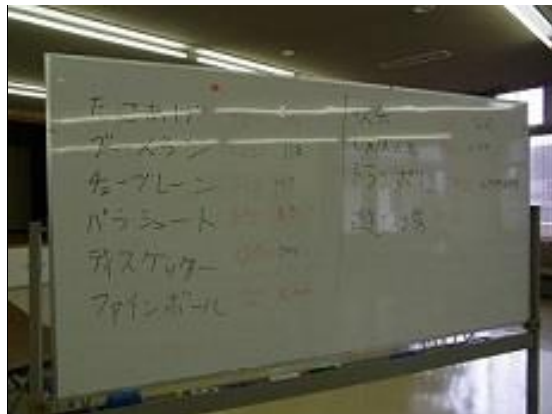


道の駅おりつめにて集合写真

野田村に到着後、総合センターで子どもたちや他校の学生と合流。ゲームで打ち解けた後、夕方からのライト・アップ・ニッポン（花火打ち上げ企画）サポートのグループ分け。



ゲームでリラックス



サポート時のゲーム別に担当者を定める

学習企画として、バスに乗車して、大阪大学野田村サテライトへ。村民の方のご厚意により私有地に建てられたプレハブ2階建て。同大学の渥美先生のユーモアとクイズを交えた講話と進行で、災害ボランティアの心がまえを話しあいながら考える機会となりました。



バスを下車して徒歩移動



大阪大学野田村サテライト



渥美先生のお話



クイズの回答を話しあう

次に、ボランティアを実践するため、ライト・アップ・ニッポンの会場へ。村の中心部にあたる屋外で、津波に洗われた広大な更地と海と空が広がり、すでに屋台とステージが開設されていました。当日は、関西などで40度ほどの暑さが報じられたものの、野田村は30度に満たず、風もあり過ごしやすい気候。私たちは、沿道で、巨大なエアトランポリンを設置し、スポネット弘前からお借りした各種ゲームの準備にとりかかりました。シャボン玉のほか、子どもと一緒に製作するスポーツたこあげ、パラシュート、ブーメラン、チューブレーン（飛行機のように飛ばす）のか、ディスクゲッター（9枚の的を10枚の円盤で射抜く）、ファインボール（弘前発祥のゴルフのような球のすくい上げ）、スポーツ吹矢など、様々な遊び道具あり。15時過ぎの開会后、ステージで、アマチュアバンド演奏、なもみ太鼓、ねふた囃子や、芸人ライブが進行する傍ら、私たちのスペースにもたくさんの親子連れや子どもたちが訪れてくれました。19時の花火打ち上げまで、学生らは休む間もなく立ち回り、閉会後の片づけも手伝ったメンバーが宿に着いたのは21時過ぎでした。



エアトランポリンと製作ブース



手製のスポーツたこあげとブーメラン



ディスクゲッターとファインボール (左上)



スポーツ吹矢



シャボン玉



打ち上げ花火

男女別に大広間で就寝。子どもと早朝から元気にラジオ体操をして朝食をとりました。



子どもは朝からお風呂に入りロビーに集結



ラジオ体操（津軽弁バージョン）

この日のテーマは「みらいしんぶん」作り。子どもたちと一緒に、野田村の20年度を想像した新聞紙面を作成します。アイデアを出しあう練習として、グループ別に、電車でお年寄りや体の不自由な人に席を譲ることを促すキャッチコピーを考えるとともに、プレゼンテーション力をつけるため、ペットボトルを千円で販売する口上を述べてもらいました。



席譲りを促すキャッチコピー作り



なぜかあみだくじや交換条件の提示も…



ペットボトルを千円で買うか子どもと審査



お涙ちょうだいの口上（？）

そして、野田村について思いつくことをポスターに書き入れる作業に移りました。魚やほたてなどの海産物、のだ塩アイスなどの食べ物や、村のマスコット「のんちゃん」、クマなどの動物や、木などの自然その他の文字で、スペースはどんどん埋まっていきました。

野田村の現状をじっくり考えてもらった後に、目標としていた「みらいしんぶん」の作成によろやく着手。20年後、2033年の野田村をイメージした、「ひと」「くらし」「あそび」「スポーツ」「たべもの」「けいざい（おかね）」の各テーマの紙面を分担執筆しました。

実のところ、子どもたちが集中して紙面作りに関わってくれるか不安もありましたが、前述のアイデア出しとプレゼンの練習を経て、できるだけ子どもたち主体で考えるよう、学生たちが対話を交えてサポートすると、小さい子どもも熱心に筆をとってくれました。



児童クラブに貼っておいたチラシ



子どものアイデアを学生と紙面にする



アイデアを書き出した後でポスターに清書



大好きな野球をテーマに未来を記す男の子

昼休みを挟んで、グループごとに、出来上がった「みらいしんぶん」を発表していきました。「あそび」「スポーツ」面は、世界初の「海の中のかんらん車 (!?)」と野球スタジアムを含む「のだワンダーランド」。野球好きの男の子を中心に、細かい部分まで考えが練られており、フロアの質問にもしっかり応答できていました。

「ひと」「暮らし」面では、「のんちゃん」に家族ができたほか、ごうかな家やたくさんのお店ができていることが報じられました。他方、「ごうかな家じゃなくても、たくさんのお店ができなくても、たくさんの家ぞくといっしょにたのしくすごせるようなまちになっています！」と締めくくられていたのが、印象に残りました。「お年寄り仲良し隊」の4コマ漫画 (!) があつたうえ、子どもたちの寸劇で実演 (!) されたのも新鮮でした。



各グループのメンバー全員で報告



みらいしんぶんの「ひと」「暮らし」面

「たべもの」「けいざい (おかね)」面にも、「おばあちゃんが、いっぱいたべものをつくる。いっぱい、たべものをくばって、元気な、のだむらをつくりたいです」という言葉がありました。野田村には実際に祖父母と一緒に暮らしている大家族が多く、子どもたちは居心地の良さを覚えているためかもしれません。同じ紙面の「お金が、いっぱい、もらえる」というくだりには、フロアの子どもから、「そのもらったお金は、工事などの復興のために使われるのですか、それとも子どものために使われるのですか」という旨の質問があり、鋭い視点で驚かされました。このやりとりに触れて、参観していた野田中学校の校長先生より「それは中学3年生がまさに勉強している論点です」と、首都大学東京の市古先生より「お金は子どものために使われます」と、それぞれコメントが寄せられました。

こども「みらいしんぶん」作りの目的は、冒頭に記した通り、野田村の子どもに地域の良さを再認識してもらうことを想定していたところ、実際には、それ以上に、参加し、傍聴した学生と教員の方が、「復興」とは何かを、子どもの視点を通じてあらためて考えさせられる結果となりました。公共工事にお金をかけた一見見映えの良い「復興」のみならず、世代間で仲良く楽しく過ごすなど、地域社会に根ざした生活の再建、維持と継承にも目が向けられるべきことを、被災地の元気な子どもたちから逆に教えられた思いがします。



グループのメンバー同士で健闘を讃えあう



最後に参加者全員で記念撮影

2日間にわたる宿泊合宿は、1日目の昼過ぎから夜までの学習とボランティア、2日目の9時から15時過ぎまでのワークショップで、ハードな日程でしたが、無事に終えることができました。参加した野田村の子どもたちと学生はもとより、微に入り細に入りコーディネートいただいたスポネット弘前の鹿内さんと、関係者の皆様に、お礼を申し上げます。

今回、一般参加ボランティアは、別行動で、2日間、道の駅のだ・産直ばあぷるでの農産物直売手伝いと、ビニールハウスの盆花収穫にあたりました。お盆前の時期にあたったため、地元の方に大変喜ばれたようでした。暑さの中での地道な作業、お疲れ様でした。



弘前へ戻るバスからお別れ



道の駅販売手伝いの一般参加ボランティア

帰りの車中では、疲れが出たようで、眠り込む参加者がほとんどでした。後半、恒例の感想タイムでは、「野田の子どものことをたくさん知ることができた」、「楽しかった」、「子どもの柔軟な発想で面白い「しんぶん」ができた」など、好意的な声が多く聞かれました。子どもへの対応やワークショップの持ち方に課題も挙げられましたが、今度、改善することができればと思います。震災から2年半ほど経ちますが、支援・交流活動は続きます。

(担当：飯考行)